



平成27年度研究助成 【音楽振興部門】より

## ムーソルグスキイの歌曲における ロシア語イントネーション模倣の諸相

広島大学大学院 教育学研究科

博士課程後期

竹下可奈子

ムーソルグスキイ (Modest Petrovich Musorgsky 1839-81) は、19世紀のロシアで活躍した作曲家である。彼は自身の作品の中で、現実を、感傷性や政治性などを排除し、ありのままに描写することを目指した。その目標到達のために彼が用いた手段には、大きく分けて2つの側面がある。ひとつは現実主義的な題材の選択、もうひとつはロシア語の話し言葉のリズムやイントネーションの忠実な再現である。彼はオペラや歌曲といった声楽作品を多数作曲しているが、その多くがロシア語の自然なリズムやイントネーションを模倣していると評されている。

ただ、その旋律線がどのようにテキストのリズムおよびイントネーションの特徴をとらえ、再現しているのかについて、客観的な視点から研究されたものはほとんどない。ムーソルグスキイの声楽作品における旋律線とロシア語イントネーションとの類似性について語られる際には、概して感情や個性といったパラ言語的、非言語的情報まで混同した研究者の聴覚印象がその根拠となっている。

しかし、近年では音響分析技術が発達したことによって、旋律線と発話のピッチやリズムを量的に比較することが可能になっており、言語学と音楽学を融合させた研究も盛んとな

っている。そこで本研究では、ムーソルグスキイの声楽作品の中でも歌曲に焦点をあて、ロシア語音声学、音韻論の知識や技術を用いて、旋律線に見られるロシア語発話模倣について客観的に検討を行う。ムーソルグスキイの歌曲は、彼の作曲人生の最初から最後まで継続的に作曲されており、それらにおけるロシア語イントネーション模倣の特徴を体系的に明らかとすることで、ムーソルグスキイのロシア語イントネーション模倣に関する作曲法およびその習得課程を明らかにすることが目的である。

強弱アクセント言語であるロシア語では、単語ごとに相対的な音の高低の型は存在せず、単語内のストレス音節は、無ストレス音節よりも強く、また長く発音される。ロシア語発話のイントネーション、つまり音高変化は単語ではなく文に付随しており、話者の意図によって大きく変化する。そのようなロシア語イントネーションを包括的に記述する枠組みに、IK理論 (Brizgunova 1981) がある。これはロシア語発話のイントネーションパターンを7つの型に類別したもので、ロシア語イントネーション研究における標準理論とみなすことができる (五十嵐 2005: 24)。

IK理論によれば、ロシア語イントネーションパターンは「シンタグマ」と呼ばれるフレーズ

単位にあらわれ、1つのシンタグマには原則として1つの「イントネーションの中心部」が存在する。急激な音高の変化はイントネーションの中心部のみで起こり、それ以外は原則として平坦に発話される。また、日本語とは異なり、音高変化の方向は上昇、下降の両方が可能である。イントネーションの中心部において音高を上昇させるのか、あるいは下降させるかについては、文章の内容や話者の意図によって変化し、IK理論ではそのイントネーションパターンが7種類同定されている。

したがってロシア語イントネーションにおいて重要なポイントとなるのはイントネーションの中心部であるが、これは話者が重要と判断した単語のストレス音節に置かれるため、話者によってどのストレス音節をイントネーションの中心部とするかは異なる。つまり、ロシア語イントネーションはIK理論等によってその枠組みが記述されているものの、イントネーションの中心部の位置や、そこでの音高変化の調子など、実際の発話から観察するほかない要素も多く含んでいるということである。したがって、本研究では2つの段階に分けて分析を行う。

まず第1段階は、IK理論を下敷きにした分析である。IK理論で記述されているロシア語イントネーションの特徴をもとに、①ストレス音節前後では音高が変化する、②無ストレス音節では音高の変化は抑えられる、③ストレス音

節は強拍におかれ、無ストレス音節よりも長い音価が配置される、という仮説を立てる。そしてすべての歌曲において単語およびフレーズの数を確定した上で、ストレス音節の扱いについて、単語およびフレーズの単位で仮説に該当する音高変化を抽出し、集計する。現時点までの分析では、作品によってリズム面での模倣を重視したものと、音高面での模倣を重視したものに分かれること、すべての歌曲の中でも、ムースルグスキ自身によって作詞された歌曲はリズム・音高面ともにロシア語イントネーションとの類似性が高い傾向にあることが明らかとなっている。

続いて第2段階は、ロシア語母語話者による実際の朗読発話にもとづいた分析である。先に述べたとおり、ロシア語イントネーションは自由度が高く、イントネーションの中心部をどこに置くかは話者にゆだねられている。したがって、話者がイントネーションの中心部をテキストのどの部分に設定するのか、またそこでの音高変化の調子はどのようなものかについては、実際の発話から調査するほかない。本研究では、ロシア語母語話者10名を用意し、ムースルグスキの歌曲や、比較対象として使用するムースルグスキの同時代のロシア人作曲家たちの歌曲のテキストを朗読してもらった。採取した朗読資料の計測は、音声分析ソフトPraat (Boersma and Weenink 2013)を用いて行った。

音声波形と広帯域スペクトログラムを同時に表示した画面を見ながら、音節境界を手作業で同定し、基本周波数曲線からフレーズ境界（シタグマ）およびイントネーションの中心部を同定した。

さらに本研究では、発話と音楽とのピッチの比較のために、計算モデルprosogram (Mertens 2014) を採用している。prosogramは、人間が実際に知覚するピッチパターンの描写を目的として開発された計算モデルであり、Praatのスクリプトとして実行される。prosogramによって再現されるイントネーションの知覚描写は、そのほとんどが平坦なピッチによって成り立っており、聞き手の脳における発話のイントネーションイメージが音楽同様であることを示すとともに、音楽との定量的な比較を可能にしている。このように採取した朗読音声と、旋律線とを比較し、両者の類似点および相違点を明確化する作業を現在行っている。

IK理論を下敷きにした第1段階の分析では、包括的な枠組みの中で明確な基準に立脚した考察が可能であるが、ロシア語イントネーションの要であるイントネーションの中心部の実態については言及することができない。それに対して第2段階の分析では、実際の話者による朗読資料を用いることで個別的な要素に立ち入った考察にはなるが、実際の発話からしか得られない情報に基づいた詳細な検討を行うことができる。この2つの段階を経ることによって、より客観的かつ論理的な研究が可能になると考えている。

本研究でもっとも困難であったのは、テキストの朗読を行うロシア語母語話者の確保と、古いロシア語文献の入手である。ロシア語母語話者に関しては、私の住む広島周辺だけでは必要とするロシア語母語話者の人数をそろえることは難しく、多くの人々の助けを借りて、都内まで朗読資料の採取に赴いた。また、古いロシア

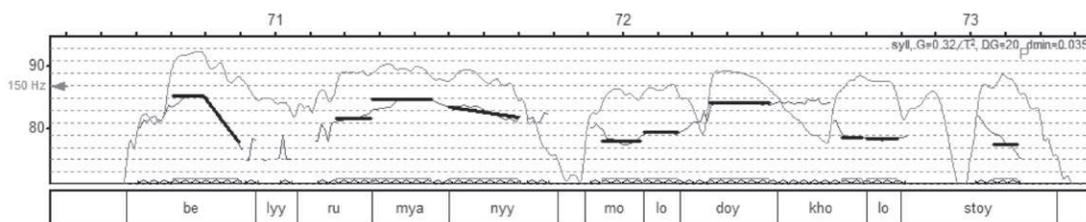


図1 prosogramによって描写された朗読資料

語文献については、ロシア国内の図書館や古書店に所蔵されていることが多く、実際にロシアを訪問しなくては入手が困難な状況であった。しかし、今回一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団から助成金を賜ったことにより、ロシアへの訪問が可能となった。モスクワ国立図書館や、モスクワ市内の古書店を巡った結果、必要としていた文献はもとより、新たな文献も多く発見、入手することができた。このような機会を与えてくださった財団各位に心より感謝申し上げたい。

## 文 献

五十嵐陽介「ロシア語イントネーションの音韻

論」博士論文 東京外国語大学 2005

Boersma, P. and D. Weenink (2013) Praat: Doing phonetics by computer [Computer program]. Version 5.3.77, from <http://www.praat.org/>.

Brüzgunova, E. A. (1981) *Zvuki i intonatsiya russkoy rechi*. Moscow: Izdatel'stvo russkiy yazik.

Mertens, Piet (2014) Prosogram: Doing phonetics by computer [Computer program]. Version 2.10, from <http://bach.arts.kuleuven.be/pmertens/prosogram/>.